

起立歩(キリット)

kiritto

VOL.34

令和2年10月発行

発行：香川医療生活協同組合
高松協同病院

発行者：院長 北原孝夫

編集：高松協同病院 広報委員会

H P: <http://t-kyodo.com/>

新型コロナウイルスに想う 院長 北原 孝夫

高松協同病院院長の北原です。今年は特別な年になりました。今まで、地震災害や豪雨災害などの局地的災害の経験はありますが、戦争でもないのに人々の暮らしに世界的広範囲で影響が出ています。特に医療関係におきましては、コロナウイルス感染者対応が求められ、感染入院病棟を持つ病院だけではなく、感染疑いに対する医療でも対応が必要となり大きな負担となっております。

高松協同病院でも、発熱患者様の受け入れは急遽用意したプレハブ診察室にて分離して対応し、入院患者様に対しては面会を付き添いを含む制限をかけ、受付に透明シートを設置したり、待合の椅子を半分座れない様にぬいぐるみを置いたりと予防に細心の注意をしております。対策はするものの、当院におきましても外来の来院患者様が大きく減りました。減った中には、本来医療を必要としているのに受診を控えている方もいらっしゃいます。治療が遅れると後々大きな影響が出ることもあるため、継続した受診と治療は必須です。このような患者様を少しでも減らそうと、職員1人1人が、患者様宅に電話をかけ、どのような状況下を聞き取り、必要であれば支援したり来院を促したりする運動を始めました。病棟におきましては、関係する施設の皆様のご尽力もあり、なんとか患者様の確保ができております。このような中ではありますが、かねてから念願であった、東病棟が回復期リハビリテーション病棟入院料1（現在は3）を取得できました。これからもより地域医療に貢献できるよう今まで以上に努力邁進する所存でございますので、今後とも宜しく申し上げます。



9月26日 県社会福祉センターにて新型コロナウイルス対策を講演

東病棟 回復期

リハビリテーション病棟

入院料1取得

高松協同病院は、2002年9月に45床の回復期リハビリテーション病棟として開院しました。その後、何回かの診療報酬改定や増改築を経て、現在は回復期リハビリテーション病棟入院料1（西病棟／45床）と回復期リハビリテーション病棟入院料3（東病棟／40床）を算定していました。

回復期リハビリテーション入院料1と3の違いとしては、①看護師の配置基準 ②PT・OT・STや社会福祉士の専従配置の数、③入院患者数のうちの重症患者の割合、が主としてあり、回復期リハビリテーション病棟入院料1の方が手厚い体制となっております。

この度、職員の配置を見直し重症患者様も一定数入院して頂ける体制になったため、2020年10月より、東病棟も回復期リハビリテーション病棟入院料1の届け出をし、認可されました。改めて、より質の高いリハ・ケアを提供していきたいと思っております。

また、2020年度の診療報酬改定で、回復期リハビリテーション病棟に入院できる期間が撤廃され、これまで期限の問題で受け入れすることができなかった患者様の受け入れも可能となっております。

これまで以上に地域の皆様のご要望にお応えできる病院を目指していきますので、今後ともよろしく申し上げます。

東病棟スタッフステーション



よろしく願いたします。



協同病院におけるLSVT治療法への取り組み

パーキンソン病は主に50歳以降に始まり、脳の一部の神経細胞の変質がゆっくり進行する原因不明の疾患です。日本では人口10万人あたり約百人で増加傾向にあり、香川県では推定約100人が罹患しています。

現在当院でのパーキンソン病患者の短期集中リハビリテーション入院の受け入れ状況は、昨年度は9名、今年度は現時点で11名の患者様となっています。高松協同病院では院内での研修を進めながら、多くのパーキンソン病の方にLSVTを提供できるように対応しています。研修を終えたお二人の抱負を聞きました。

リーシルバーマン療法 (LSVT) とは、「歩幅が小さくなったと言われる。立ち上がって最初の一步が出せない。ボタンを留めるのに時間がかかる。」などといった症状に対する動作の大きさに焦点を当てた治療プログラムのことを言います。主にパーキンソン病の発話障害・運動障害に対する治療法です。パーキンソン病の軽度～中等度の方に対して特に効果的であると言われています。最終目標としては、日常生活で大きな動作が行えるようになること、大きな声を出すことができるようになることが挙げられます。患者様が前向きにリハビリテーションに取り組めるよう、精一杯アプローチが出来るよう取り組んでいきたいと思ひます。



西病棟
松本理学療法士

パーキンソン病に特化したリハビリテーションとしてリーシルバーマン療法 (LSVT) というものがあります。その中で発話障害に対する治療を行うLSVT-LOUDは、声を大きく出すことに焦点を当てたプログラムで、パーキンソン病の方は会話の声が小さくなりがちのため、大きな声で話す習慣を身につけるようトレーニングします。会話の声が大きくなるのみでなく、嚥下機能の改善や脳機能の活性化などさまざまな側面に効果があるといわれています。

短期入院の患者様を中心に実施していますが、実施後に「こんなに大きな声が出ると思わなかった、声を出すのが楽になった、大きな声を出すのは疲れる」等の意見がありました。疲労感が強いプログラムになりますが、患者様が明るい気持ちでリハビリできるよう取り組んでいきたいと思ひます。



外来リハビリ
近藤言語聴覚士

2020年7月より

訪問ST (言語聴覚士) のリハビリ枠が増えました!!

協同病院訪問リハビリテーション科では、「日々の暮らしを自分らしく暮らすため」利用者さまひとりひとりに合ったリハビリテーションを行っています。

院内の異動に伴い、訪問STの体制が兼務 (0.4名) から常勤 (1名) に変わります。

※職員体制：理学療法士3名、作業療法士3名、言語聴覚士1名

ST兼務
0.4名



ST常勤

1名



直通電話 (087)833-2416

訪問リハビリのことは、
お電話でお気軽に
相談ください。

新スタッフ紹介

こんにちは。言語聴覚士 (ST) の山内彩美です!

話すリハビリや食べるリハビリを主に担当しています。言葉が上手く出ない、スムーズにしゃべれない、または食事時によくムセる、食事の量が減ってきた…等お困りのことはございませんか? ご相談のみでも大丈夫ですので、気軽にご相談ください。よろしくお願ひします。